

「スポーツ学」考
—ターミノロジー（術語学）の視点—

藤井英嘉¹⁾

Some Thoughts of “Sport study”
—A point of view of Terminology—

Hideyoshi FUJII

Abstract

For the first time in Japan a university using the term “sport” for a college name, held its entrance ceremony on April 3, 2003 and started the first step with 237 students.

The names of college, faculty and department, in compliance with Monbukagaku-sho are as follows: college name is “Biwako Seikei Sport College (BSSC)”, faculty name is “Faculty of Sport Study”, departments’ names are “Department of Lifelong Sport” and “Department of Athletics”. These titles are the naming of this educational organization which are based on “Sport study” (or Sportwissenschaft, Sport science) as an academic backbone.

Now the first edition of our college bulletin is being published, so I hope to report my thoughts for an outline of Sport Study and to receive comments from various sources inside and outside of school as one of the individuals in charge of establishing this college.

The term “Sport-gaku” in Japanese (known as Sport Study in English) hasn’t received wide recognition yet, but it is used in various means by many specialists and common people.

For the following reasons; the term “Taiiku-gaku” (known as physical education sciences or physical culture sciences), “Taiiku-kagaku” (same as Taiikugaku) “Sport-kagaku” (Sport Science), “Undo-kagaku” (Physical Activity Sciences), “Kenko-kagaku” (Health Sciences) and so on, are generally used as the terms for physical education and sport.

“Nihon Taiiku Gakkai” or “Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences” held its first research meeting in 1949, soon after World War II, so the term “Taiiku-gaku” is familiar to many Japanese, but whether this term has been appreciated by the majority or not, remains to be seen.

Then the following terms “Taiiku-kagaku” (Physical Education Sciences), “Sport-kagaku” (Sport Sciences), “Undo-kagaku” (Physical Activity Sciences), “Kenko-kagaku” (Health Sciences) and so on, were used and established themselves as academic terms.

In the nineteen-seventies, “Sports for All” and in the nineteen-eighties, “Lifelong Sport” were emphasized and many research themes for physical education and sport were changing to have the naming of “Sport”. At that time various academic societies of physical education

1) 生涯スポーツ学科

and sport were established, adopting a name of "Sport" independently from each section of the Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences.

Examples of these include "Society of Sport History", "Society of Sport Sociology", "Society of Sport Psychology" and "Society of Sport Pedagogy". On the other hand the university of physical education and the faculty of physical education had to undertake educational reform. Therefore changing the name of the universities and faculties were indispensable factors.

In 1997 "Taiikudaigaku Kyougikai" (University Conference of Physical Education, Health and Sport) established "Daigakumondai Kento-linkai" (Investigation Committee of University Affairs, with T. Asami as its chairman) and started to try to investigate these affairs. Then this committee developed into "Taiikukagaku Kento Tokubetsu-linkai" (Special Investigation Committee of Physical Education Sciences). In 1999 this committee reported "Chukan-hokoku" (an interim report).

In the process of this investigation some universities of physical education changed the names of their faculties, for example from "Faculty of Physical Education" to "Faculty of Sport Science" or to "Faculty of Sport and Health Science".

Besides these organizational approaches, the interest in the term "Sport" was also raised among individual researchers for physical education and sport. Recently professor Masahiro Inagaki of Nippon Taiiku University has often referred to the term "Sport Study" in his numerous publications about sport theory. And in 1997 a booklet titled "Sport-gaku no Mikata" (A point of view to Sport Study) was published by Asahi News paper Company. In this booklet Professor Tsuneo Sogawa of Waseda University claimed to have broken the wall of "Academic taboo" with a title "Invitation to Sport Study" and with a headline "Play and Pastime made blossoms bloom with Academism". In this context our college was named "Sport College" and "Faculty of Sport Study".

Thus, the aim of this paper is to do research on various meanings of the term, by surveying the term "Sport study".

To make it easier for people to understand, I decided upon the following three subjects; first "Sport-gaku Izen" (Sport Study before) second "Sport-gaku no Ima" (Sport Study at present) and the third "Sport-gaku no Tenbo" (Perspective of the term "Sport Study") for getting status in the future.

Key words : Sport Study, Physical Education Science, Lifelong Sport, Athletics, Sport Science

はじめに

わが国初の「スポーツ」という語を用いた大学は、2003年4月3日に入学式を行い、237名の学生とともに、その第一歩を踏み出した。設置認可における大学、学部、学科の名称は、「びわこ成蹊スポーツ大学」(Biwako Seikei Sport College=BSSC)、「スポーツ学部」(Faculty of Sport Study)、「生涯スポーツ学科」(Department of Lifelong Sport)、「競技スポーツ学科」(Department of Athletics)であるが、これらの大学・学部・学科の名称は、いずれも「スポーツ学」を学問研究のバックボーンとした教育組織である。本学開設の初年度に紀要創刊号が発刊される運びとなり、筆者は認可申請の実務に携わったものの一人として、その際に認識した「スポーツ学」の概要についての私見を披瀝し、学内外各方面からのご批判を仰ぎたいと考えた。

さて、「スポーツ学」という「学術名称」(以下、「術語」という)が、今多くの研究者・専門家の間でも、或いは一般の人びとの間でも、多様に用いられるようになっている。しかし、この術語は必ずしも明確で一般的な定義づけを未だ得ていない現状にあると筆者は考えている。それは、これまでの体育・スポーツの領域における術語としては、「体育学」、「体育科学」、「スポーツ科学」、「運動科学」、「健康科学」等が一般的だったからである。体育学を研究する人びとで構成する「日本体育学会」は、戦後間もない1950年(昭和25年)に第1回大会を開催しており、体育学という術語は、その定義が明確で一般的だったかどうかは別として、多くの人びとの理解するところとなっていたのである。その後、科学万能社会の進展に呼応するかのように「体育科学」という呼び名が多く使われるようになるのをはじめとして、スポーツ科学、運動科学、健康科学といった呼び名が続々と登場し、術語として定着していくようになる。

1970年代に入ると、「みんなのスポーツ」が、1980年代には「生涯スポーツ」が叫ばれるようになり、それまでの体育・スポーツに関する研究内容の多くは、スポーツを冠するものへと転換していった。この時期に、日本体育学会の各分科会から、スポーツを冠した学会が次々と誕生していった。例えば、スポーツ史学会、スポーツ社会学会、スポーツ心理学、スポーツ教育学会等々がそれぞれある。一方、このような状況が進展するなかで、体育大学・体育学部を有する高等教育機関(大学)においては、大学新設や学部増設などを含む大学改革にとって、大学・学部の名称の問題は不可欠の要素となっていた。1997年(平成9年)には、体育大学協議会が「大学問題検討委員会」(浅見俊雄委員長)を発足させ、この問題を組織的に検討する試みを始めた。この委員会は、その後「体育科学(仮称)検討特別委員会」(岸野雄三委員長)へと発展し、1999年には「中間報告」を出している。こうした検討が進むなかで、いくつかの体育系大学では、体育学部からスポーツ科学部やスポーツ・健康科学部などといった学部名への変更を行っている。

このような組織的な動きとは別に、体育・スポーツに関する研究者の間でも、「スポーツ学」に関する術語についての関心は高まりつつある。最近多くの刊行物を公にしている日本体育大学の稲垣正浩教授は、それらの出版物の中で、「スポーツ学」について言及している。また、1997年には朝日新聞社から「スポーツ学のみかた」という表題の冊子が刊行されている。このなかの巻頭において、早稲田大学の寒川恒夫教授は、「スポーツ学への招待」という見出しで、「遊び、気晴らしがアカデミズムで花を咲かせた」という標語を掲げて、スポーツ学が「アカデミック・タブー」を突破したとの見解を出している。

このような経過をたどるなかで、本学は大学・学部の名称をスポーツ学に依拠して、「スポーツ大学・スポーツ学部」としたので

ある。

このように、「スポーツ学」という術語を概観することによって、その語が内包しているさまざまな意味を探究することが、この論稿の大きなねらいである。このことの理解をより一般的なものにするために、ここでは「スポーツ学」という術語が、今にたどりつくまでの状況を「スポーツ学以前」という項に、今検討されているこの術語の意味を「スポーツ学の今」という項に、そしてスポーツ学をめぐる将来的展望を「スポーツ学の展望」という項に区分して構成することにした。

1. 「スポーツ学」以前

「スポーツ学」以前の状況を探るために、ここでは3つの資料に依拠して述べることにする。その一つ目は、「現代体育学体系・2 体育史」(岸野雄三著:1973年:大修館書店、以下「大修館・体育史」と表記する)であり、二つ目は、「体育大学協議会・体育科学検討特別委員会:中間報告」(委員長:岸野雄三:1997年、以下「中間報告」と表記する)であり、三つ目は、「スポーツ学のみかた・AERA Mook <New 学問のみかたシリーズ③>」,朝日新聞社:1997年、以下「スポーツ学のみかた」と表記する)である。これら3つの資料をここに取り出したのは、これらの資料が「スポーツ学」以前を考える上で、多くの示唆を与えてくれるし、そのことが非常に重要だと考えたからである。

(1)「大修館・体育史」における術語について

このなかで、著者岸野は、体育の語義と定義という表題に、「術語研究への新提案」という見出しを設けて、術語研究の内容は①名辞の術語化、②術語の体系化、③基本概念の明確化であるとし、その説明のなかで、体育・スポーツに関する学術名称としての術語について西欧語(とくにドイツ語を中心に)の分類を次のように行っている。

A) erziehung 型

Körper (Leibes) erziehung (独語)

physical education (英語)

Education physique (仏語)

Физическое Воспитание (露語)

B) kultur 型

Körper (Leibes) kultur (独語)

physical culture (英語)

caltur physique (仏語)

Физическая Культура (露語)

C) Übungen 型

Körper (Leibes) Übungen (独語)

physical training (英語)

entrainment physique (仏語)

Физическая Тренировка (露語)

この分類は、今「スポーツ学」という術語を考察する場合、その前段階の学術名称として、理解しておくべき予備知識という意味において重要だと筆者は考えている。また、体育学(体育科学)の曖昧性について指摘したジーガーの次の見解は非常に興味深いものである。その見解は、本書における次の文章に見ることができる。『ジーガーは、体育<学>とは、wissenschaftか Theorie か Lehreかと問いただし、また身体教育や身体文化の<身体>をLeibかKörperかと尋ね、体育学とは身体文化学なのか、スポーツ学なのか、身体教育学なのかと言って、これまでの体育学(体育科学)の曖昧性を問題にする。』この一文のなかで、岸野は明らかに、Sportwissenschaft の訳語として「スポーツ学」という術語名を例示しており、1970年代すでに、その考えのなかに「スポーツ学」という理解があったという点に着目すると、著者岸野の先見性と炯眼に改めて敬服させられる。

この資料にあまり深入りすることは避けるが、ここで日本語の「体育」と「身体文化」という術語の変遷を概観しておきたい。わが国において体育や身体文化という術語が登場する以前には、養生、鍛練、稽古などの術語が一般に使用されていた。慶応3年当時の英和辞

典には、gymnasticsは、「身体ヲ健康ニスル稽古」と訳されている。ドイツ語のKörperliche Erziehung英語のphysical educationの訳語としての「体育」が使用されるのは、明治10年頃からだとされているが、本書に書かれている部分を要約するとおよそ次のとおりである。

『体育という用語は、明治9年の「文部省雑誌：6月号」に見られる「体育」を初見とする。これは、近藤鎮三の造語であり、明治11年以降はこの用語が定着していく。しかし、学校における教科の名称としては、gymnasticsの訳語である「体術」（明治5年の「学制」に採用）、「体操」（明治6年の「学校令」に採用）が長く使用されることになり、「体育」が教科の名称となるのは、戦後のことである。一方、ドイツ語のKörperkultur、英語のphysical cultureの訳語が、「身体文化」となるまでにはさまざまな経緯をたどっている。例えば、森有礼は「身体能力＝体能」、児玉厚生省局長は「体力」、篠原助市は「身体の修養」、舞踊家の中村は「身体陶冶」と訳している。また、戦後には、浅井・佐々木グループは「体育文化」、前川峯雄は「体育文化＝physical education culture」、丹下グループは「運動文化」という用語を用いている。昭和35年に至って、田中鎮雄と邦正美は、身体文化を用いている。』

ここに見るかぎり、少なくとも1960年代までは、「スポーツ学」という術語とそれに伴う概念規定などは、その片鱗すら無いのであって、今私たちがスポーツ学として位置づけようとしている内容を、さかのぼって古い時代からそれは存在していたのだという人もあるが、筆者はここでは今私たちが定義しようとする「スポーツ学」についてのみ考えることにしたい。とは言っても、本書において著者岸野が明らかにしている学術名称の経緯は、今のスポーツ学を考える上で、非常に重要な手がかりを与えてくれるものに違いはない。

（2）「中間報告」における術語について

体育大学協議会は、全国の体育・スポーツ系大学・学部が加盟する組織であり、本年度に、本学と早稲田大学スポーツ科学部が加盟した。この協議会に設置された「検討委員会」は、この委員会における検討の趣旨について『今日、体育科学（体育学）の学術名の改称は、欧米をはじめとして、大きな問題となってきたが、それらを比較検討し、改名問題を通じて「体育科学」の本質を探究しようというのが、本検討委員会の趣旨である。』と述べている。

この「中間報告」では、体育・スポーツに関する現在の学術名称についての問題点を次の3点に集約しているので、先ずその事に触れておく。

①「体育学」は時代に即応しなくなった。総合科学に相応しい名称への改称が必要であること。

②「体育学」や「体育科学」は伝統的に「教育学」と関連して形成された概念であり、欧米のように、改めて基本的に検討する必要がある。

③新しい学術名称が定着するためには最小限度の時間的余裕が不可欠であることから、検討は慎重に行うことが必要である。

以上のように、この中間報告では、これまでに一般的に使用されてきた体育学や体育科学がすでに新しい世紀を迎えた時代に相応しきれなくなったとの認識が、この問題へのアプローチの原点になっていることが分かる。また、体育という術語が如何にしても教育と関連して概念形成がなされていることを払拭できない状況からの脱皮が必要だという認識をも示している。

この中間報告は、合計5回に及ぶ会議の結果を集約したものであるが、その審議は現代の科学論を土台にして、体育科学の科学性という観点から、次の5つの問題を設定しているので、その要旨をここでは取り上げておく。

①「体育科学」をめぐる問題

この問題を考える上で、中間報告のなかから次の二つの文章を引き合いに出して、考察する。

『この語源は、Gymnastikeという古代ギリシャ語に由来し、ルネサンスの時代に再び使用された。もちろんドイツなどで体育という用語も、この頃に使用されているが、Gymnasticsという用語は西欧が国民国家の時代になっても、それぞれの国民体育のシステムがSwedish Gymnastics, German Gymnastics, Danish Gymnasticsなどと称され、Gymnasticsが使われている。』

この文章では、体育という用語の語源から入って、Gymnasticsの訳語として「体育」が専ら用いられたと指摘し、その科学が体育科学として認識されたことを物語っている。

『すでに述べたように、近代の日本で「体育」(physical education)という名辞は、戦後の日本に定着し、学校の内外で用いられる教育概念となった。したがって、体育学や体育科学は、身体運動を対象とした科学であると同時に、それは教育学や教育科学に包摂される科学として、多くの専門学(disциплиネ)からなる総合科学と考えられた。だから、この科学は、たとえば体育心理学、体育社会学、体育方法学などから、運動生理学、運動生化学、運動力学などにわたる人文・自然系の諸学から構成された科学である。しかし、いずれにしても、それは体育科学という以上、「身体教育学」を前提として、位置づけられた科学として了承された。換言すれば、この専門諸学を枠取る「親科学」は、教育科学なのである。』

この文章は、体育学や体育科学が如何にその内容を総合的にアレンジしたとしても、その学術名称の冠に「体育」がつくかぎり、教育学の関連から解き放されることはないとの指摘である。今私たちが、親科学を教育学に求めないスポーツ科学から、さらに発展した形態としてのスポーツ学を構想する場合、この点は非常に重要である。

②身体運動科学をめぐる問題

中間報告では、身体運動に関する科学として、欧米で使用されている術語を取り上げながら、その意味を明らかにしている。そのことは次の文章から垣間見ることができる。

『もちろん、＜運動科学＞(movement science, Bewegungswissenschaft)やキネシオロジー(kinesiology)が欧米で使われてきたが、研究者や時代によって、その概念規定は、いろいろであった。』

『ところでアメリカでは、元来がヨーロッパ起源のkinesiologyが、これまで学術名や学部名として使用されてきた。要するに、それは体育科学やスポーツ科学以上に「運動」が意識されたアメリカ的な運動科学になり、movementやexerciseなどについての専門諸学の総合科学である。』

この二つの文章は、欧米において身体運動科学が体育科学を代表する用語として用いられる場合があることを物語っており、身体運動の研究が重視されていることを窺い知ることができる。

③スポーツ科学をめぐる問題

スポーツ学を構想する場合、最も関連深い学術名称として「スポーツ科学」が挙げられる。そして、スポーツ学とスポーツ科学の共通点と相違点を明らかにすることが、とりもなおさずスポーツ学の構築につながるものと考えられるのである。そこで、ここでは中間報告のなかにある次の二つの文章から、そのことに迫ることにする。『スポーツはイギリスに由来する用語であるが、それはフランスにもドイツにもアメリカにも通ずる国際語である。特に、フランスはクーベルタンが出現し、スポーツを国際化し、スポーツの名辞を国際語にするために、大きな役割を果たした。』『詳細なことは省略するが、とにかくここで指摘したいことは、スポーツがあつての科学であり、科学あつてのスポーツではないという点である。スポーツが大前提であり、スポーツが主体になっている。ここにまたス

スポーツ科学の宿命とも言われる特性がある。』

この二つの文章から、国際化したスポーツを研究する領域の学術名称としての「スポーツ科学」の特性として、＜スポーツあつての科学であり、科学あつてのスポーツではない＞点をあげていることに筆者は注目している。

④健康科学をめぐる問題

このことについては、次の二つの文章を引き合いに出しておく。

『このように、医学と健康学（＝衛生学）と体育学は密接な関係があり、それだけに後進学と先進学との間で論争や紛争が絶えなかった。そのために一般人からみれば概念の混乱があり、この点は本委員会でも再三話題となったほどである。』『健康科学の学名は、「衛生学」「公衆衛生学」「保健学」などと呼ばれているが、その概念規定を明確にして再出発しない限り、健康科学の性格はアイマイになるということ、これが本委員会の結論ともなった。』

この二つの文章から、健康科学という学術名称が、その概念規定の曖昧さを内包しながら使用されていることを窺い知ることができる。

⑤体力科学、身体文化科学をめぐる問題

この中間報告が、なぜ体力科学と身体文化学を同一の項目にしたのかは、筆者には理解しがたい面もあるが、一応この項目で次の二つの文章を参照したい。

『この科学は、元来生理学やバイオメカニクスなどの自然系との関係が深い。これに対して身体文化学は、人文系との関係が濃厚である。最近は両者とも次第に学際化し、総合科学的特徴が強くなってきた。』『西欧における身体文化（physical culture）に注目したが、それを「身体づくり」と理解している。したがって、それは身体「教育」よりも狭義の概念で、「トレーニング」として捉えられている。だから、それは教育の下位概念に過ぎず、ましてや文化の概念とは直接に関係が

なかった。』

この二つの文章から、身体文化という学術名の意味が「身体づくり」と捉えられ、身体教育の下位概念として認識されていることには賛成できないが、このことが、ここには現実問題として提起されていることに注目しておきたい。

以上、体育・スポーツ系大学の全国的組織である「体育大学協議会」が、学術名称について検討した「中間報告」の内容を、スポーツ学という学術名称を構想するための前段階として考察したが、このような術語学（ターミノロジー）的な変遷をたどりながら、新しい概念規定を伴った「スポーツ学」の構築を目指す必要があるとの認識を強くした。次に、第3の資料「スポーツ学のみかた」を検討する。

（3）「スポーツ学のみかた」における術語について

この冊子は、スポーツ医・科学を中心とする「スポーツ科学」という学術名称の枠組みから、ややともすればはみ出してしまう人文・社会科学系の学問を応用した理論を如何に取り入れるかという観点で編集されており、新しい学問の呼び名として、「ファッション学」、「気象学」、「社会福祉学」と並んで刊行されている。また、この冊子は、新しい時代に即応する新しい学問の「みかた」をシリーズ化したものであるが、その一つとしてスポーツ学が取り上げられていることは、スポーツ学への高い関心を示すものと考えてよからう。

①「総説」に見るスポーツ学の認識

この冊子の「総説」とも言うべき論稿は、寒川恒夫氏（早稲田大学スポーツ科学部教授）の「スポーツ学って何だ」という文に始まるものであるが、その文は次のように続くのである。

『今日われわれがスポーツといって思い浮かべるのは、サッカーやマラソンやテニスな

ど、つまり19世紀後半以降に主にイギリスにおいて形を整えたいわゆる近代スポーツ、すなわち国際スポーツのことである。それでは、スポーツ学はこうした国際スポーツについてもっぱら研究するのかといえば、専門研究者はもっと広いことを考えていると答えなければならない。彼らは語源に照らしてスポーツをイメージするのである。』と述べて、スポーツ学の対象となるスポーツ事象を、オリンピックや世界選手権、ワールドカップなどの表舞台で展開されている「国際スポーツ」に限定せず、その語源にさかのぼって理解される広義のスポーツ（持ち場を離れるすべての活動）にまで広げようとしているのである。執筆者の寒川氏は、続けて『スポーツ学の主たる研究対象は国際スポーツ、歴史的スポーツ、民族スポーツだが、「遊びの学」としてのスポーツ学では、これら3類型以外に非競争的な遊び行動をも扱う。』としている。さらに、同氏はスポーツ学とスポーツ科学は同義であるとし、スポーツ科学と言うよりもスポーツ学と言う方がその「総合性」がより強調されているのだと言う。そして、用語としてのスポーツ学の初見を1933年のドイツ語 Sportwissenschaft としている。また、その内容としてのルーツを古代ギリシャの「ギムナステイクー」に求めているのである。次に、この冊子に取り上げられている専門諸学を取り上げることにする。

②取り上げられているスポーツ専門諸学（スポーツ科学）の種類

この冊子に取り上げられている「学術名」は、その代表的な研究者20名とともに、次のような領域が紹介されている。ここに取り上げられている専門諸学を大きく分類して見ると次のようになる。

〔自然科学系＝医学・生理学・運動学関連領域〕

○「スポーツ医学・内科（川原 貴：東京大学）」○「スポーツ医学・整形外科（増島 篤：東芝病院）」○「運動生理学・調節機構

（山本義春：東京大学）」○「運動生理学・神経・筋系（田口貞善：京都大学）」○「運動生化学（定本朋子：奈良女子大学）」○「スポーツ栄養学（金子佳代子：横浜国立大学）」○「スポーツ運動学（三木四郎：大阪教育大学）」○「バイオメカニクス（大道 等：国際武道大学）」○「測定評価学（波多野義郎：東京学芸大学）」○「スポーツ工学（池上康男：名古屋大学）」

〔人文・社会科学系＝哲学、歴史、社会、心理学等〕

○「スポーツ哲学（山口順子：津田塾大学）」○「スポーツ史学（高橋幸一：山形大学）」○「スポーツ人類学（宇佐美隆憲：東洋大学）」○「スポーツ心理学・能力開発（佐久間春夫：奈良女子大学）」○「スポーツカウンセリング（中込四郎：筑波大学）」○「スポーツ社会学（佐伯聡夫：筑波大学）」○「スポーツマーケティング（広瀬一郎：（株）電通）」○「スポーツ教育学（高橋健夫：筑波大学）」○「武道論（杉江正敏：大阪大学）」○「スポーツ法学（千葉正士：東京都立大学）」

このように、自然系と人文・社会系の分類では、それぞれ10を数えており、等しく取り上げられている。このことは、この冊子が意図している「スポーツ学」の見方を反映しているものと考えることができる。すなわち、自然系への著しい傾斜を避け、人文・社会系の専門諸学をバランスよく取り入れようとする意図が伺えるのである。

③スポーツの「ワンダーランド」に応えるスポーツ学

この冊子のなかでは、「スポーツワンダーランド」という表題で、数頁が割かれているが、その項目と執筆者は次のとおりである。

○日本人のスポーツ観（中村敏雄）、○日本人に向いているスポーツ（野々宮徹）

○スポーツルール論（守能信次）、○スポーツ産業論（原田宗彦）

○ドーピング問題（武藤芳照）、○スポーツジャーナリズム学（玉木正之）

○戦後日本スポーツ盛衰史（高橋義雄）

ここでも、この冊子が、体育・スポーツに関する一般的な理論をアカデミズムの世界に引き入れようとする意図をもっていることを窺い知ることができる。そしてまた、体育・スポーツの研究領域として新しく登場している「ジャーナリズム論」、「産業論」を特に取り上げていることに、その意図が特徴的に現れていると私は分析している。

④スポーツアカデミズムを標榜する「50のキーワード」

この冊子が、「遊び」をも含み込んだ「スポーツ」をいわゆる「アカデミック・タブー」から解放して、人文・社会系の領域を積極的に取り入れようとしていることを、個々に掲げられている「キーワード」にみることができる。

〔運動生理学〕○最大酸素摂取量、○最大酸素負債量、○AT（無酸素性作業閾値）、○メッツ、○トレーニングの三大条件、○筋の肥大と萎縮、○姿勢反射、○運動学習、○赤筋と白筋、〔スポーツ医学〕○RICE、○アラインメント、○疲労骨折、○運動療法、○理学療法、○過換気症候群、○運動性貧血、○熱中症、○急性高山病、〔バイオメカニクス〕○バイオメカニクスの定義、○力学の三法則、○筋収縮、○パワー、○力積、○効率、○重心と安定、○心理的限界と生理的限界、○慣性モーメント、○調整力、〔スポーツ心理学〕○クローズドスキルとオープンスキル、○練習効果の転移、○全習法と分学法、○イメージトレーニング、○要求水準と達成動機、○スポーツと不安、○スポーツとあがり、○リラクセーショントレーニング、○スポーツとパーソナリティ、○スポーツセラピー、〔スポーツ社会学〕○生涯スポーツ、○スペクテータースポーツ、○スポーツの大衆化、○スポーツ・メディア、○スポーツ憲章、○スポーツ産業、○スポーツ振興法、○スポーツ政策、○ヨーロッパ・みんなのスポーツ憲章、○トリム運動、○スポーツマンシップ、

○スポーツナショナリズム

以上、スポーツ学以前という項目を設定して、「大修館・体育史」、「体育大学協議会・中間報告」、「冊子・スポーツ学のみかた」の3つの資料を通して考察したが、今私たちが「スポーツ学」の構築を目指すとき、その前段階を知ることの重要性を痛感したし、スポーツ学の今を考え、将来を展望する「基礎」を示唆してくれる要素が多くあることを実感した。

2. 「スポーツ学」の今

つい最近「スポーツ学のルーツ」という表題の文献が、明和出版から、2003年12月1日付で発刊された。この文献の著者は、岸野雄三先生の薫陶を受けたスポーツ史古代研究における専門家の高橋幸一氏（山形大学教授）である。著者がこれまでに積み上げてきた研究成果の集大成を「スポーツ学」としてまとめていることに私は大きな関心をもつ。この文献に見られるように、今や、体育・スポーツに関する「アカデミック」な世界は、「スポーツ科学」から「スポーツ学」への移行を始めたのではないと思われる。しかし、自然系の領域までも包括した概念規定に向かっているかどうかなどまだまだ混沌としていることに間違いはないことも付言しておかねばならない。

この文献の発刊に象徴されるような「スポーツ学」という術語は、今様々な領域で使用されているが、必ずしもその概念規定が一定しているとは思われない状況にあることもまた事実であろう。このような状況を私は敢えて「スポーツ学の今」と捉えて、現時点で「スポーツ学」をどのように考えたらいのか、その視点を探りたいと考えたのである。

そこで、この項では、「スポーツ学事始め」（稲垣氏の未発表原稿）、「現代思想とスポーツ文化」（叢文社出版）、「稲垣氏との対話（座談会）記録」の3つの資料を拠り所にして、スポーツ学の今を考察する。

(1)「スポーツ学事始め」の視点から見るスポーツ学

ここでは、日本体育大学稲垣正浩教授の「スポーツ学事始め」と題する未発表論文を取り上げ、稲垣氏が構想しているスポーツ学とそれを今「事始め」として発想している点に注目したい。まずは、その未発表論文の内容についての要約を述べることにする。

①「科学」偏重主義からの脱出

まず、稲垣氏の見解を見ることにする。

『1960年代を境に、科学万能主義の風潮がアカデミズムを席卷した。そのような風潮の中で、科学といえどもっぱら「自然科学」であり、文学、歴史や哲学などの人文科学や法律学や社会学などの社会科学は、敢えて人文とか社会とか言う言葉を冠につけなければ科学の仲間入りができない状況になっていた。そしてまた、その風潮は科学が即学問であり、アカデミズムの世界は、まさに科学すなわち自然科学万能の時代に突入していったのである。そのような風潮は、例えば、歴史学の領域においても「特異」な状況が起こってくる。それは、歴史学を科学に仲間入りさせるために、「資料実証主義」が優位に立ち、単なる歴史は物語として科学の世界からは見放されていった。このようにアカデミズムの世界或いは学問の世界そのものが、科学＝自然科学万能の傾向をたどるようになり、大学における教育・研究も医学、理学、工学を中心とする自然科学万能の状況が顕著になってくる。このような世界的な傾向は、わが国においても例外ではなかった。わが国における近代の大学が医学、理学、工学を中心に発展したことを見れば一目瞭然のことである。しかし、このような傾向は、一方で人間の「モノ」化を進めることにもつながっていった。医学の世界で一般化されつつある「移植手術」などは、その典型的な事例かもしれない。また、スポーツの世界で大きく取り上げられている「ドーピング」の問題もこの範疇に入るのかもしれない。このような人間の「モノ」化現

象に対する批判も多く現れるようになり、21世紀の今、少しずつ「科学万能主義」からの脱出が叫ばれるようになり、次第に実際にそのような動きが活発になってきている。例えば、私の専門領域である「スポーツ史」においても、これを「体育史」と呼んで、書き物として残されている資料についてのみ研究するという現象が長く続いてきたが、無形文化財として残されているものや書き物として残されていないものについての研究もスポーツ人類学という学問のもとで行われるようになってきた。このようななかにも、科学万能主義からの脱出が見られる。』この見解には、コメントを加える必要がない。

②「スポーツ科学」偏重主義からの離脱

体育・スポーツに関する「学問」を表現する名称として、従来は、「体育学」や「体育科学」或いは「スポーツ科学」が用いられてきた。しかし、それらが一旦「科学」と言われるようになると、どうしても自然科学的な内容になってしまうのである。このことについては、稲垣氏の次のような指摘が当をえている。「スポーツ科学は、その後一人歩きを始め、当初の思惑とは異なる方向に進展してしまった。そして、ついには「体育学」のなかの「自然科学」系の諸学をくくる上位概念として、あるいは、専門諸学のなかの一つの領域として考えられるようになってしまった。」

さらに、稲垣氏は次のように続ける。「スポーツ科学からはみ出してしまった「スポーツ史」や「スポーツ人類学」、そして「スポーツ哲学」などは、どこに帰属すればいいのか。」体育史は、体育学の中にきちんと収まっているが、かといって「スポーツ史」が体育史あるいは体育学を上位概念として、そこに帰属させることができるであろうか。はなはだ疑問の多いところである。これらの疑問や納得のいかない部分を解消してくれるのが、スポーツ学の確立であり、そこへの帰属である、と強調している。

③「経験知」としての「スポーツ実践学」の重視

先ずは、稲垣氏の見解から入ろう。『スポーツ実践学とでも称すべき領域の知の体系を「学」として認知することである。スポーツ実践の最先端に立って指導している人びとが蓄積している「知の体系」である。例えば、スポーツ選手の指導に当たっている専門家の人びと、教育現場（幼、小、中、高、大など）の指導に当たっている教師、あるいはまた、生涯スポーツの指導者、その他もろもろの体育・スポーツ指導者と呼ばれる人びとの「知の体系」である。これらの現場指導者たちの蓄積している「知の体系」を、「スポーツ科学」は軽視してきたきらいがある。なぜなら、現場指導者の「知の体系」は単なる「経験知」であって、「科学的ではない」という理由で軽視され、排除されてきたからである。すなわち、科学偏重主義による弊害がスポーツの指導現場にも起きているのである。例えば、一人の優れた選手を育てるために、監督・コーチはどれほどの情熱を注いで、選手を観察し、情報を集め、試行錯誤を重ね、創意工夫をこらしているか、は周知のとおりである。しかも、全人格をかけての真剣勝負の世界である。一步間違えば大怪我につながるような、ギリギリの選択のなかで、日々実践に打ち込んでいるのである。そうしたものの「総和」が「経験知」として結晶していることもよく知られている。まさに職人芸と呼ぶに相応しい。このことは学校の教育現場に立つ指導者もまったく同じである。もちろん、その他の現場指導者も、同様の創意工夫を重ねてきており、その質・量ともに貴重なものである。この「経験知」を「学」として受入れ、体系化することはできないだろうか。』

この見解は、スポーツの世界において、「科学偏重主義」のために、「学」としての評価を得ることができなかった「経験知」の評価が復活してくるとともに、科学偏重主義による弊害を是正するための方策の一つとして

も、スポーツ実践の現場で蓄積されたものが「知の体系」としてまとめられ、それが今まで「科学」と呼ばれた「知の体系」と肩を並べる状況が生じていると解釈してよからう。ここで考えなければならないことは、社会全体の「科学万能主義」にすっかり染まってしまったスポーツの世界にも、そこからの離脱が叫ばれるようになってきたことを意味しており、ドーピングの問題ともあわせて考えれば十分に理解できるものと思っている。しかし、経験で蓄積された「ノウハウ」が体系化されないまま、その指導者の思い込みだけで整理されていた場合には、一般化できないばかりでなく、他の選手には通用しないか、もしくは害になることさえある。だから、経験によって得られた「知」が体系化され、「学」のレベルまで止揚されていくことが必要なのである。このことは、一人の指導者の問題ではなく、多くの人びととの協力体制（プロジェクト研究など）によって、成り立っていくものと考えられる。これからの体育・スポーツ系の大学は、このような「経験知」を「学」として、成立させるための研究にも積極的に取り組む必要があると痛感している。

④「総合知」としての「スポーツ学」への道

これまでに述べてきたことは、社会全体のなかに大きな流れとしてあった「科学万能主義」あるいは「科学偏重主義」と呼ばれる現象に、スポーツの世界がすっかり取り込まれていて、そのためにさまざまな弊害が現れてきていたことに気づいて、このままではいけないという考え方が方々から指摘されるようになってきたという論調である。そこで、「経験知」をも包含することが肯定されるような学問の名辞として、「スポーツ学」が提唱されることになるのだが、このことについてもまた稲垣氏の見解を見ることにしたい。

『「スポーツ学」であれば、「科学的」でない「知の体系」も包含することができる。ここでいう「スポーツ学」の「学」とは、ドイ

ツ語の“Wissenschaft”のことを考えており、「知の集合体」のことである。ここは、スポーツに関する「自然科学的知」も「現場の経験知」も、そして哲学や思想のような「人文的知」もすべて包括することができる。もちろん、その他のスポーツにかかわるあらゆる領域の専門諸学をも包括することができる「スポーツ学」こそ、これらの上位概念として絶好の受け皿ではないか。』

この見解は、これまでに使われてきた「スポーツ科学」という用語がもつばら自然科学的な事項ばかりを取り扱い、主としてスポーツに関する医・科学の面で著しい発展を遂げ、それ以外のいわゆるスポーツ文化やスポーツ教育学を。科学として低い価値で見るか、ないしは科学の範囲には認めない状況を作りだしていたことへの批判を展開しているものと私は考察している。すなわち、これまでの「スポーツ科学」は、決して、スポーツに関する総合学ではなかったということであり、「スポーツ科学」という用語がもつ意味もまたスポーツに関する総合的な学問体系を表現するものではなかったということである。スポーツに関する基礎研究と称して「動物実験」のみを深めて、一向に人間が展開しているスポーツ活動に応用する理論を展開しない研究が、スポーツ科学としてまかり通っていたこれまでの現象を、多少極端な引例ではあるが、私は痛烈に批判したいのである。ましてや、このようなスポーツの現場に応用もできないでいながら、現場での経験の蓄積が低く見られたり、研究の範囲から追い出されたりしていたのである。スポーツ学を総合学と見ることの現代的意味はここにあるものと私は考えている。しかも、スポーツ学という場合は、そのなかに取り上げる対象もまた、総合的な面に広がるのである。一般に生活の中にスポーツを生かそうとする人々から、一流選手として活躍したいと願う人々にいたるまでの各層を含み込んだ総合的な対象を設定することができるのである。そして、スポー

ツ学の研究成果は、この各層におけるスポーツ活動へのサポートとなるし、研究そのものもまた大きな広がりを見せることになるのである。

以上、稲垣氏の発想する「スポーツ学事始め」の原点とも言うべき、4つの観点を引き合いに出して、スポーツ学の今を検討した。ここに掲げた「科学偏重主義からの脱出」、「スポーツ科学偏重主義からの離脱」、「経験知としてのスポーツ実践学の重視」、「総合知としてのスポーツ学への道」という4つの観点に、「スポーツ科学」（体育学、体育科学をも含めて考える）から「スポーツ学」への転換軸が存在するのだと私は考察している。そして、「スポーツ学」という学術名称がたどり着いている今の意味であると考えているのである。また、稲垣氏がこの発想を「事始め」としていることに、強く引きつけられるのは、本学が先駆的な一步を踏み出した今だからこそ強烈に感じるのであろうと私は認識している。「スポーツ学」という術語によって、体育・スポーツに関するアカデミズムに新しい地平を切り拓くことに大きな期待を持つとともに、本学の進むべき航路のより有効な羅針盤となるように思えるのである。

（2）「現代思想とスポーツ文化」から見るスポーツ学

この文献は、稲垣正浩氏の編著によるもので、フランス現代思想の研究者である西谷修氏との対談形式で書かれたものである。今、体育・スポーツに関して、旺盛な著述活動を展開している日本体育大学大学院教授の稲垣氏とフランス現代思想研究の最先端を行く東京外国語大学教授の西谷氏との対談は、これからの「スポーツ学」を構築していく上で、非常に多くの示唆に富んでおり、私はこの文献で語られているさまざまな事柄がまさに「スポーツ学」の今を語るに相応しいものだと考え、ここに取り上げたのである。

この文献のなかで、西谷氏はジョルジュ・

バタイユの「非一知」の世界をスポーツに応用させて、その独自の論を展開しているし、稲垣氏は新しい「スポーツ学」の構築を目指すなかで、その基礎となる独自の「身体論」を披瀝している。この両者の「掛け合い」は実に見事なものがあり、読者の対象も学生・院生となっており、私はこの文献を本学における「スポーツ哲学」の講義に参考書として採用している。

ここで、西谷氏が巻末に掲載している『「非一知の強度」を分かち合う』という表題の文章は、現代思想の研究者の目から見た、「スポーツ学」の姿を垣間見ることができるし、その卓見に啓発される面の多いことに感服しながら、ここに取り上げた次第である。

〔「非一知の強度」を分かち合う〕

西谷氏の仕事のベースは、ジョルジュ・バタイユの「肉体体験」（「非一知」の体験）を肯定する立場からの発想である。そのことについて西谷氏は、『それは、「わたし」という意識が難破し、その「わたし」の不在のなかで、知的な営み（生）と感覚的（身体的）な生との区別がなくなった無限定な「強度」が生きられる瞬間でもある。バタイユは、その瞬間を「人間」のうちから排除しないで考えようとした。しかも、それは単に普遍的な「人間」の問題ではなく、近代化し、世界化した産業社会のもとに生きる人間の問題としてである。』と述べている。この西谷氏の見解は、バタイユの思想の根幹には、①わたしの不在、②知と感覚の合一、③産業社会の問題、という要素が認識されているということを私は読み取った。そしてこの見解が、スポーツ学の構想に、一定のつながりをもつのだと考えた。

西谷氏は続けて、スポーツ競技者（特に一流選手）は、「非一知の強度」を身をもって知っているから、そういう人々の集まりでは自分の話が親和感をもって受け入れられるのだと言い、スポーツ関係者との話し合いに好感を持っていることを表明している。また、

彼は自らの「スポーツ観」について、『スポーツ競技が成立するためには、そこに社会的枠組みが確立されている。すなわち、そこには、育成組織があり、競争があり、期待する社会や観衆があり、メディアがあり、資金があり、産業があり、とくに一流選手には国民的期待という負担もある。だから、本来、「私的」に体験されるはずの「非一知の強度」は、錯綜する社会関係のなかに織り込まれるのであって、実際スポーツは、そのような社会関係の網の目のなかにしか存在しないのだ。』と述べ、だからこそ、スポーツ関係者が自分の「非一知の強度」を念頭においた「戦争」や「死」や「近代」や「生命」や「身体」をめぐる話に耳を傾けてくれるのだと述懐している。

さらに、西谷氏は、近代スポーツを「人間機械論」の観点から、産業社会と親和していると言ひ、「人材育成論」のなかで「社会化」教育への役割を認識し、近代オリンピックに象徴される「ナショナリズム」との結合を指摘する。加えて、国家の教育システムのなかでは、「体育」という実技中心の教科として取り扱われ、スポーツの社会的広がり意識化する回路は狭かったことも指摘している。したがって、「体育」が国家の教育政策に枠付けられている以上、それをはるかに超えるスポーツの問題圏を「体育諸学」が覆うのは難しくなると述べている。彼は、マックス・ウェーバーが語った「世界の脱魔術化」（非合理的なものが信じられなくなり、世界は魔法が解けた）による「興ざめ」の世界の出現が、逆説的に近代スポーツの成立と広がりを促したのだと分析している。そのことを考える上で、彼はホイジンガの古典「ホモ・ルーデンス」は絶好の素材であることも指摘している。このことは、現代社会が合理主義に走りすぎて、見失いかけていた「人間臭さ」のようなものを、スポーツがもつ「スペクタクル」さ、や「祭り気配」によって、思い起こさせようとしているのだと、私たちに問いかけて

いるように私は受け止めている。

そして、西谷氏の叙述は、次のように括られている。『おそらくスポーツのありようを包括的に照らしだす「スポーツ学」といったものが構想できるかもしれない。いや、体育学からスポーツ史へと歩み出て、いまはスポーツを総合的な「文化」として考えている稲垣さんが、すでに目指しているのがそのような「スポーツ学」だ。その試みに、わたしの仕事や発言がいささかでもお役に立てば望外の喜びである。これからもお互いに「非一知の強度」を分かち合いながら対話を続けていきたいと思う。』

この文献における西谷氏の論述のなかから、スポーツ学の構想に関係する事柄に限って触れたが、現代思想研究の最先端をいく西谷氏が、その目から見た「スポーツ学」の概観について貴重な示唆を与えてくれているものと、私は受け止め、この記事に深く敬意と感謝の意を表したいと思っている。

また、この文献における編著者である稲垣氏は、「エピローグ」として、バタイユの思想から自らの身体論を引出し、感銘深い文章を掲載している。彼が、そのことを通して、スポーツ学の構想に対する基本的な考え方を提示しているので、ここにその主要な部分を紹介し、一定のコメントをしておきたいと思う。とくに、稲垣氏の「身体論」に裏打ちされたスポーツ学の構築に私は強い関心を抱いているので、その意味で可能な限りのコメントを試みたいと考えている。

まずは、「エピローグ」における稲垣氏のバタイユに関する見解を紹介するところから始めることにする。彼は、先ず『バタイユは「エクスターズ」の体験をヘーゲルの「絶対知」の対極に位置づけ、その「極点」にあるものとして「非一知」と名づける。そして、「非一知」を「知にあらざるもの、すなわち恍惚であり、笑いであり、神との合一体験よりはるかにテンションの高い、恐ろしいほどの「強度」に支えられた至福の体験である。』

と述べ、バタイユの思想の認識を示している。続けて、『「絶対知」を錦の御旗にして、「非一知」を徹底して排除してきたヨーロッパ近代の戦略が大きな壁にぶち当たっている。即ち、「非一知」を否定することは人間存在の半分以上を否定することを意味するのだということに気がつかなかったということである。』と述べている。

さらに、彼は、このエピローグの終わりに、スポーツの起源がまさに「非一知」の充満した世界であったとして、次のように述べている。『それは、祈りであり、賭であり、決闘であり、儀礼であり、呪術であり、祝祭であり、憂さ晴らしであり、肝試しであったり、とまさにカオスの世界であった。それこそディオニュソス的³⁾世界の全面展開であった。智慧も暴力も狡知も正義もみんなごちゃ混ぜになった世界がそこに開示されていた。』スポーツの起源に関するこのような見解は、近代合理主義のなかで生まれた近代スポーツの成立を論じるのとは、その趣が大いに異なるのである。とはいいながらも、彼は、『21世紀は、アポロンの⁴⁾なるものとディオニュソス的なもののインバランスをどのようにして取り戻すのかということが課題となる。それはしかし、ただ、むかしに帰ればいい、というほどに単純なものではない。むしろヨーロッパ近代を通過したのちに開けてくる地平でのディオニュソス的なものの再生は、「絶対知」を視野に入れた上での「非一知」の承認が必要である。』とも付け加えているのである。

ここで、「現代思想とスポーツ文化」における本文のなかに、触れられている次の「用語」は、スポーツ学の今を考える上で、非常に示唆に富んでいると考えるのでここに取り上げておく。それは、「ヘテロノミーとオートノミー」という用語である。この語は、西谷氏が本文のなかで「近代以前の社会は……、ヘテロ、違うところからノモス、規範がわれわれ以外のところからやってくる

社会です。そういう状態をヘテロノミーというとなすと、人間社会の規範を人間自身が作り出す、これをオートノミーということができます。」と述べ、前近代と近代の特徴をこの用語で説明している。この語は、人間が「どうしようもないこと」に度々遭遇するとき、それが前近代を特徴づける「ものの見方・考え方」の基本にあったことを考えることの大切さを感じさせるものだと筆者は思っている。これは、スポーツに関するさまざまな状況にも当てはまるのだと思われる。

※「ディオニュソス的」

ディオニュソスはギリシャ神話の酒神。ディオニュソス的とは、ニーチェの説いた芸術衝動の型で、陶酔の世界に属し、激情的・衝動的なもの。(反対語＝アポロンの)

※「アポロンの」

アポロンは、ギリシャ神話の十二神の一。ニーチェの説いた芸術衝動の型で、夢想の世界に属し、調和ある統一、端正な秩序をめざす主知的傾向のもの。(反対語＝ディオニュソス的)〔以上、「広辞苑」〕

(3)「スポーツ学の基底にある身体論」の視点から見るスポーツ学

ここでは、稲垣氏が「ドイツスポーツ大学・ケルン」において、客員教授として講義した内容を手がかりにして、身体論からスポーツ学を概観してみたいと考える。なお、この項は、私と稲垣氏との対話形式で記述することにする。

藤井：今多くの領域の研究者たちの関心事として「身体」の問題がありますが、稲垣先生はドイツスポーツ大学・ケルンにおける「ゼミナール」で「身体論」を展開されたと聞いています。まずは、そのことから話を始めてください。

稲垣：今日、身体概念に関する議論が広い範囲で展開されています。少なくとも、日本ではとても盛んです。およそ、身体に関心を持たない研究者はいないのではないかと思います

れるほどに、多くの専門領域の研究者たちが新しい身体概念の模索に高い関心を寄せています。例えばそれは、文学、歴史、医学、分子生物学、哲学、演劇などの領域で、いくつかの本の出版が相次いでいることから推察できます。最近では、心臓移植後を生きる身体について、自らの体験を語った哲学者ジャン・リュック・ナンシーの「侵入者」という本が話題を呼んでいます。また、学校教育の現場でも、若者たちの化粧やファッションや身体加工などの問題が持ち上がっていますし、日常生活を営む一般市民もまた、過食・運動不足などによる肥満をいかに解消するか、というテーマが重くのしかかっており、新しい身体概念に基づく生活リズムを模索しつつあります。今や、身体をどの様に理解し、その概念をわがものにし、自らの身体とどの様に折り合いをつけるかといった問題が、21世紀を生きるわれわれの日常の最大のテーマになりつつある。との認識を持ちながら、ケルンでのゼミナールにおける身体論を展開しました。

藤井：ケルンにおける講義のなかで、先生が展開された「身体論」の発想と意図がよく分かりました。実は、私自身ナンシーの「侵入者」は、非常に感銘を受けましたし、本学の「スポーツ哲学」の講義に、その理論を引用しているところです。このなかで、とくに私が考えさせられていることは、身体の「モノ」化現象の進行と身体の「部品」認識の助長という観点で、心臓移植を見ることもできるし、臓器移植による医療問題が身体観の根底を揺さぶる事態を醸成しているのではないかとさえ思えて、非常に大きなショックを受けました。そこで、今先生が言われたわが国における身体への関心の広がりについて、考えられるその理由についてお聞かせください。

稲垣：その理由については、私は3つを考えています。その一つ目は、先端科学の研究成果が、これまでの身体概念のパラダイムに

適合しなくなったことであり、二つ目は、現代思想及び哲学の分野での議論が活発になっていて、その議論のなかで新しい身体概念が求められていること。そして三つ目は、近代的な制度や法律や組織などから受ける閉塞感からくる児童・青少年の身体の反逆という実態で、これは自閉症とか不登校といった現象に現れています。このような三つの理由が考えられると思うのですが、そのことを踏まえて、結論的なことを話しておきますと次のようになります。『今まさに身体概念が近代の「閉じられた」身体から後近代の「開かれた」身体へと拡散しはじめているということです。この「閉じられた」「開かれた」という概念については、今後深めていきたいと思えます。』

藤井：新しい身体概念の構築が必要である現状について、三つの理由がよく分かりましたが、そのような現状を踏まえて、「身体論」と深く関わっている「スポーツ科学」や「健康科学」などの領域において、身体論に関する検討が十分に行われているとは思えないのですが、私もスポーツ史の研究領域を志している者として、これまでに身体観の変遷史に対してあまり大きな関心を払ってこなかったことを反省しています。スポーツ史やスポーツ人類学の領域のこのような状況を考慮に入れながら、先生の考えを聞かせてください。

稲垣：残念ながら、スポーツ科学の分野での身体論論議は決して熱心だとは言えないと思います。もし、この論議があったとすれば「ゴールデン・プラン」や「みんなのスポーツ」の促進運動のなかで展開されたいわゆる「処方箋」的なものだったと思うのです。本来は、身体論については先ずスポーツ哲学の分野が反応すべきだったと思うのですが、洋の東西を問わず、スポーツ哲学の研究者たちは、あまり関心を示してこなかったように思われます。このように、スポーツ科学は新しい身体概念の模索にむけての貢献を殆どしてこなかったと言えるのではないのでしょうか。

このことは、誠に由々しき問題だと私は思っています。そしてまた、このことを単にスポーツ哲学領域の問題に矮小化するのではなく、運動生理学やバイオメカニクスやスポーツ医学などの研究者についても同様のことが言えるのだろうと考えています。

藤井：スポーツ科学とりわけスポーツ哲学の領域における身体論論議の不熱心な現状はよく理解ができました。確かに、スポーツ科学の原点とも言うべき身体論が、それほど具体的に取り上げられなかった事実は否めないと私も考えています。そこで、私たちの研究領域である「スポーツ史」の立場で、身体論を歴史的視点で考察することについての見解を聞かせて下さい。

稲垣：スポーツ史研究においても「身体概念」とは何かという「テーゼ」は極めて今日的重要性を有していると考えているのですが、この重要性をめぐる感じ方は、スポーツ史研究者のセンスの問題でもあると思います。このようななかで、私は身体概念の問題を、前近代―近代―後近代という時代区分を通して、歴史的にその変遷過程を分析しようと試みています。このことを前提として、私は身体概念の問題は、スポーツ社会学、スポーツ心理学、スポーツ教育学などにおいても極めて重要なテーゼであると思うのですが、残念ながら、これらの領域からも、新しい身体概念を模索・構築する上での顕著な研究成果は挙がっていないと私は思っています。なかでも、身体教育が「体育」として学校教育に取り入れられている現状を考えると、一層新しい身体概念について当該研究者が熱心になることが望まれます。この意味で、21世紀のスポーツ教育学は、新しい身体概念の模索・構築という根本問題に依拠して体系化されることが大切だと思っています。

藤井：スポーツ科学と称する学問領域において、本来その根本理論であるはずの「身体概念」問題が、あまり熱心に論議されてこなかったという、現状についてはよく分かりま

した。ここで、私自身がこれから新しい身体概念の構築に取り組むときの下敷きにしたいと思いますので、ケルンでの講義のなかで展開された先生自身の身体論のエキスの部分を披瀝してください。

稲垣：そのことに直接答えることになるかどうか分かりませんが、私は身体概念の問題を考える上でのテーゼとして、「近代から後近代への移行期の身体概念」、「スポーツする身体」、「エクスターズする身体」の三つを挙げておきます。

一つ目のテーゼは、現代に対する時代認識の問題です。私は、時代認識を分かりやすく説明するために、スポーツ史の時代区分として、前近代―近代―後近代の3区分法を用いていますが、そのなかで近代論理が臨界点に達している「近代」から、それを超克する「後近代」への移行期が現代であるとの時代認識を持っています。この時代認識から、スポーツ史を概観しているのですが、その根本にある身体概念の問題についても、この時代区分と時代認識のもとで考えていきたいと思っています。

二つ目のテーゼは、スポーツの展開場面に対応して、そこにおける「スポーツする身体」を考えることです。「スポーツをする身体」には、初心者からベテランに至るまでの身体をどの様に考えるのか、そして最終的にはトップ・アスリートたちの身体概念はどのようなところに到達するのか、といった点は現時点では殆ど明らかにされていないのです。スポーツする身体こそ、近代論理を体現するひとつの典型的な事例ではないかと私は思っているのです。とくに、近代スポーツにおいてそのことは顕著なのです。だから、近代スポーツが内包する論理を徹底的に追求していくことによって、その論理を具現することになるスポーツする身体の内実も明らかになってくると考えています。ひるがえって、日本の武道する身体に目を向けてみますと、「武道する身体」と「スポーツする身体」とは大き

く異なります。すなわち、それは前者が前近代性を多く継承しているのに対して後者は近代化を経ることによって始めて可能となったと言うことです。さらに、ここで付け加えておきたいのが「舞踊する身体」です。これもまたスポーツする身体とは大いに異なります。この舞踊する身体と武道する身体とは同義のものだということを付言しておきます。それは、「舞」と「武」が漢字の語源をたどっても分かるように「同根」のものなのですが、そのこととそれを行う「身体」が同義であることにつながっているのだと思っています。

三つ目のテーゼは、エクスターズする身体についてですが、このことは先に述べました舞踊する身体をシャーマンの踊りと関連させるとき、舞踊する身体とも密接な関連を持てきます。ここで言うところの「エクスターズ」という用語は、ハイデガーの「エクスターゼ」、ジョルジュ・バタイユの「エクスターズ」の概念を援用していますが、いわゆるバタイユの「非一知」の世界における身体ということになります。そして、スポーツする身体―武道する身体―舞踊する身体という系譜をたどっていきますと、おのずからエクスターズする身体にいたりついてしまいます。すなわち、これらの三つの身体の系譜の淵源がエクスターズする身体にあるからだと思っています。そしてまた、そこには哲学・思想上の根源的なテーマが隠されていることに気がつきます。それは、「ディオニュソス的なもの」(ニーチェ)、「脱自態」(ハイデガー)、「恍惚」、「非一知」(バタイユ)、「接触・分割/分有」(ナンシー)などの一連の哲学・思想家たちのテーマなのです。さらに言えば、このことは日本の「禅」の思想に通底するものと言ってもよいでしょう。

藤井：新しい身体概念を模索し構築するための基本的な考え方について、詳しく説明していただき、先生の意図していることがよく分かりました。とくに、それぞれの身体概念

の系譜をたどるなかで、最終的にはエクスターズする身体にたどりつくこと、そしてそれが哲学的・思想的根源に至りつくことを理解することができました。しかし、それぞれの身体概念が、具体的な行動の展開場面とどの様に結びつくのかという点になれば、その具体的な様相をイメージすることには到達していません。そのことについては、今後それぞれの立場で追求していくことが必要であろうと考えています。先生は、この度のケルンでの講義内容をまとめて刊行されると聞いていますので、その中で詳しく考察させていただこうと思います。最後に、身体概念構築の展望をも睨みながら、コメントをいただければ幸いです。

稲垣：これは、ケルンにおけるゼミナールのキーワードとして提示した用語ですが、その一つ目が、「閉じる」「開かれる」という用法です。このキーワードは、その文脈によって異なりますが、例えば「閉じる」「閉じざる」身体／思考、「閉じられた」「開かれた」身体／思考、「自閉する」「開きっぱなし」の身体／思考といった具合に使用します。二つ目の用語は、「他者肯定」「他者否定」です。「禅」の思想は、限りなく「他者肯定」の立場に立ちますし、「閉じざる」身体／思考に対応します。逆に、「他者否定」は、「閉じる」身体／思考に対応します。最後の三つ目は、「すべての生と差異の肯定に向けて」というものです。私たちが、これから始めようとしている身体概念探索の旅の目的（ゴール）を、私はこのキーワードに設定してみたいと思っています。

藤井：これまでの先生の発言を聞いていて、ケルンにおける中身の濃い身体論の展開に感服いたしました。近刊の内容が今から楽しみです。改めて、しっかりした身体論に裏付けされた「スポーツ学」の構築が必要であることを痛感しました。ご協力に感謝いたします。

以上、「スポーツ学事始め」、「現代思想と

スポーツ文化」、「スポーツ学の基底をなす身体論」の三つの観点から、「スポーツ学」の今を考察したが、「スポーツ学」以前の考察と合わせて、将来的には、それらの考察結果を参考にしながら、単数表記の「スポーツ学」の確立に向かって、本学の教育・研究の実践を通して、独自のもので、さらに一般化できるものを構築しなければならないとの自覚を新たにした。

なお、稲垣氏は、「新世紀スポーツ文化論」（体育学論叢Ⅴ：2002年：（株）タイムス発行）に、「ジャック・マイヨールの《孤独》」という論文を掲載しているが、その中で、近代論理に疑義を提示する人の出現について述べている。そこでは、ニーチェ（「神は死んだ」）、フロイト（「精神分析」）、バタイユ（「主体の外の体験」）、デリダ（「他者性」）、ナンシー（「分割・分有」）といった人々をあげている。また、同書Ⅵにおいて、「21世紀スポーツ文化の転換軸」と題する論文のなかで「他者肯定」という用語で、新しい世紀はこの考え（東洋の武道の基本的な思想）が重要視されると指摘している。

筆者は、先に取り上げた「ヘテロノミー」と「他者肯定」をキーワードとするスポーツ文化こそが、私たちがこれから指向する「スポーツ学」の根底に流れるものだと考えている。

ここで、参考資料として、本学と同時に発足した早稲田大学のスポーツ科学部が教科書として編纂した「教養としてのスポーツ科学」という冊子に取り上げられている事項を列挙しておく。この事項は、スポーツ科学という術語を用いているが、明らかに私たちが目指す「スポーツ学」と合い通じるものがある。そのような意味で、参考にしたいと考えたのである。

第1部「スポーツについて考える」 ○スポーツの感動（みる魅力、みられる魅力）、○スポーツの起源と歴史（起源とその発展、近代スポーツの誕生とその発展、現代のスポ

ーツ), ○スポーツとメディア (スポーツとメディアのかかわり, メディアバリューとしてのスポーツ, スポーツとメディアの相互作用), ○スポーツの政治・経済的効果 (スポーツイベントの社会的効果, スポーツと政治, スポーツによる健康づくり, スポーツの経済的価値), ○スポーツと教育 (スポーツは教育的か, 「身体教育」とスポーツ, 「スポーツによる教育」とスポーツ, 「スポーツの中の教育」とスポーツ, スポーツ教育の国際的動向), ○スポーツと倫理 (スポーツ倫理の必要性, スポーツ倫理の研究動向, ドーピングと倫理, ドーピングの倫理的検討), 第2部「スポーツをする身体について考える」○動作を生む身体の構造と機能 (動作を発現する身体の構造と機能, 動作を制御する身体の構造と機能, 動作を持続する身体と機能), ○スポーツによる身体の変化 (骨格筋の性質と張力発揮, 神経系からみた運動の分類と心理的限界, 収縮のエネルギーと仕事への変換効率, 運動に伴う体温上昇と呼吸・循環器系応答), ○健康とスポーツ (健康スポーツの歴史, 運動・スポーツの健康に対する効果, 運動・スポーツによる疾病予防と治療, 生活習慣病に対する好ましい運動処方), ○コンディションと疲労 (コンディションと疲労の概念, 運動器のコンディションと疲労, コンディションを悪化させる要因, コンディショニングの方法), ○トレーニングの原則とトレーニング科学 (体力とトレーニング, プラクティス, トレーニングの原理・原則, 筋力・パワーのトレーニング, 持久系のトレーニング), ○スポーツ選手の栄養 (スポーツ活動における栄養の役割, スポーツ活動と栄養の働き, スポーツ活動と栄養補給), ○スポーツ選手の心理 (スポーツの学習理論, モチベーション (動機づけ), メンタルコンディショニング, 選手の心理, コーチの心理), ○トップパフォーマンスへの挑戦 (トップパフォーマンスとは何か, パフォーマンスの評価, 国際試合への挑戦, トップパフォーマンス

スのサポートシステム, スポーツ科学の発展とスポーツ環境革新への対応) 第3部「スポーツサポートについて考える」○指導とコーチング (発育発達とスポーツ, トレーニング計画, オープンマインド, ティーチング (Teaching) とコーチング (Coaching), スポーツの安全管理とリスク管理, ○技術・戦術・戦略の分析 (技術・戦術・戦略とは, スポーツ技術の分析例, 技術分析, バスケットボールにおける技術・戦術・戦略について), ○スポーツによる傷病とリコンディショニング (スポーツ選手に多い内科疾患, スポーツ選手の外傷・障害, 疾病後のリコンディショニング), ○疾病の予防とメディカルチェック (スポーツ障害の発生要因, スポーツ選手のメディカルチェック), ○スポーツ医科学研究とサポート (競技力向上の科学的サポート, 医科学研究と競技力向上), ○スポーツドクターとトレーナー (スポーツドクター制度と役割, 日本のトレーナー資格と役割, NATAと養成カリキュラム, 競技現場におけるメディカルサポート), ○スポーツを支える組織とスポーツ振興 (スポーツ行政と政策, スポーツの組織統括と競技団体, 地域スポーツ組織とボランティア (クラブ・NPO), ○スポーツに関連する産業 (スポーツ産業の発展, スポーツ産業の広がり, 家計消費支出からみたスポーツ産業, スポーツの関わる職業 (仕事) 第4部「現代スポーツの諸問題」○スポーツ・メディアに起因する問題 (放送権料とユニバーサル・アクセス権, 放送権バブルの崩壊, スポーツ番組を考える), ○スポーツの産業化に起因する問題 (スポーツマネジメントの人材不足, スポーツの各種権利の問題, スポーツ開発に伴う問題), ○地域スポーツの振興をめぐる問題 (地域スポーツとスポーツNPOをめぐる問題, 学校の運動部と地域スポーツをめぐる問題)

以上がこの冊子の「目次」に示されている事項であり, ここでは体育・スポーツに関する事項が4部構成で整理されている。このこ

とは、本学の学科・コースの分類とは、必ずしも近似してはいないが、その内容において共通するところは多い。本学との相違点、共通点を考える上での好材料だと筆者は考えている。

3. 「スポーツ学」の展望

本学が本邦初の「スポーツ」を冠にした大学・学部であり、その学問的支柱としているのが「スポーツ学」である以上、本学の教育・研究は、「スポーツ学」という術語で表記される学術名称に相応しい「専門諸学」に依拠しなければならない。その意味で、スポーツ大学発足のこのときに、「スポーツ学の今」をしっかり把握するとともに、その「学」としての展望を持つことが重要であると考え。そこで、スポーツ学の「以前」と「今」の状況認識に基づいて、その将来を展望することにする。そのための理論構成として、「単数表記」の学問としての体系化を目指す、近い将来的な展望と、現時点で考えることのできる範囲での遠い将来的な展望とに一応区分して考えることにする。

このような観点から、先ず「単数表記」の「学」としての体系化を目指すための具体的な展望について私見を述べ、次にその目指す展望に到達するまでの経過としての「近い将来的展望」における具体的な構想に関する見解を述べたいと思う。そこで、この項では、「専門諸学の総合化の試み」という見出しで、経過的な近い将来的展望を語ることにし、「スポーツ学の体系化と定義の確立の試み」という見出しで、遠い将来的展望を取り上げることにしたい。

(1) 専門諸学の総合化の試み

単数表記のスポーツ学を構想することは、その前に「スポーツ=sport, sports」そのものの単数表記と複数表記について考えておく必要がある。わが国では、カタカナ表記としての「スポーツ」は、一般的には複数表記の

表現であるが、最近使用されている英語の単数表記についても同じように「スポーツ」ではなく、「スポーツ」というカタカナ表記を用いているのが普通である。本学の大学・学部名についても、このことについては同様である。単数表記の「スポーツ」は、その実態とともに用語としての意味が明確になり、使用頻度も急増している。しかし、カタカナ表記では「スポーツ」を用いるのは非常に稀である。紛らわしさを避けるために、私も本来「スポーツ」と表記すべき事項でも、敢えて複数表記のカタカナ「スポーツ」を用いているのである。このことに関連して、現代の用語としての「スポーツ学」の源流である外国語の Sportwissenschaft=sport science についても、それが今はっきりと複数表記の Sportwissenschaften=sports sciences から、単数表記へと移行していることが実感されるのである。

以上のことを前提として、これから目指す単数表記のスポーツ学を目指す動きの「経過」として、先ずは現時点で考えられる関連専門諸学の総合化という作業から入りたいと考えた。総合化の観点として「スポーツ医・科学と運動学・健康学」、「スポーツ文化学」、「スポーツ教育学」という分類で、現在進められているスポーツ科学の範疇で考えられている専門諸学の総合化を考えることにした。

① スポーツ医・科学と運動学・健康学とスポーツ学

このカテゴリーのなかでは、体育・スポーツに関する自然系の学問領域の全てを含めて考えようとしている。したがって、このカテゴリーには、スポーツ医学、生理学、解剖学、遺伝学、分子生物学などの医学関係領域と、運動生理学、バイオメカニクス、運動学、キネシオロジー、運動力学、コーチ学などの運動学関係領域、保健学、健康学などの健康科学関係領域が入るとされる。そして、このカテゴリーにおける主な研究方法としては、「臨床」「実験」「測定」「疫学調査」「情報処

理」などが考えられるので、このカテゴリーの分類名として「臨床・実験系」という語を付してもよいのかもしれない。

②スポーツ文化学とスポーツ学

このカテゴリーのなかでは、体育・スポーツに関する人文・社会系の学問領域の全てを含めて考えようとしている。したがって、このカテゴリーには、体育スポーツに関する哲学、歴史、人類学、心理学（前項と重なる部分もある）などの人文科学関係領域、社会学、法律・政治学、マーケティング論、産業論などの社会科学関係領域が入ると思われる。そして、このカテゴリーにおける主な研究方法としては、「文献・資料研究」「フィールドワーク」「解説」「分析」「批判」、「実態・意識調査」「事例」「判例」などが考えられるので、このカテゴリーの分類名として「資料分析系」という語を付してもよいのかもしれない。

③スポーツ教育学とスポーツ学について

このカテゴリーでのなかでは、これまで体育学及び体育科教育学として、とりわけ「経験知」の集積として蓄積されている研究成果の全てを含めて考えようとしている。したがって、このカテゴリーには、体育科教育学、スポーツ教育学、体育学、保健科教育学、保健学・健康学、学校保健などの教育学関係領域が入ると思われる。そして、このカテゴリーにおける主な研究方法としては、「観察」「事例」「統計」「分類・パターン化」「試行」などが考えられるので、このカテゴリーの分類名として「事例・観察系」という語を付してもよいのかもしれない。

（2）スポーツ学の体系化と定義の確立の試み

ここで言うところの「体系化」とは、あくまでも「スポーツ学」が応用学とは言いながらも単数表記が可能で、それに相応しい基本概念（哲学・思想・歴史）と研究に関する内容（範囲と学際）と方法（分類と総合）などの「学」（必ずしも現在広く理解されている

「科学」の概念には適合しないかもしれないが・・・）として整えるべき条件を整備し、「スポーツ科学」や「体育科学」そしてまた、「体育学」という表記で一般化されている現在の体育・スポーツに関する研究の領域に、新たな「学」の体系を提起することを意味している。また、ここで言うところの「定義」とは、体育・スポーツに関する研究の世界に新しい地平を切り拓くために、これまでの「科学」という表記でくくられていた内容を再検討し、再構成し、拡大発展させ、さらに「経験知」を重要視し、総合学・実践学という観点を基盤として定める「定義」のことである。

このような構想は、一朝一夕に実現できるものではなく、具体的な研究成果が積み重ねられて始めて可能となるのだと思われる。しかし、目指す方向性は明確に持っていなければならないこともまた当然のことである。敢えて単数表記という言葉にこだわりながら、スポーツ学の構築を、本学の教育・研究の実践を通して実現させていくことに、今は大きな夢と期待をもっている。

おわりに

「スポーツ学」という学術名称＝術語は、今各研究領域はもとより、様々な分野でも盛んに用いられるようになってきているが、その概念や内容は区々にわたっており、一般的にはスポーツ科学を総合化したもの（あるいは、寄せ集めと言った方がいいのかもしれない）として使っているケースが多いように筆者は思っている。「スポーツ」というカタカナ表記の単数表記と複数表記の意味の相違を厳密に検討することの必要性が生じる程に、スポーツは今や、文化の一形態としてその体裁を整えつつあり、社会の認知を得て、確固たる市民権を得てきているのである。筆者は今回、このような現状を、「スポーツ学の今」と認識し、それ以前と以後の展望とに分けて「スポーツ学」という術語の意味について私論

(稲垣理論を下敷きにして)を試みたが、これから将来に向けて、本学が目ざす「スポーツ学」の独自の理論を構築すべく努力を傾けていきたいとの自覚を新たにしている。筆者のこのような私論の背景には、次のような社会認識(あるいは歴史認識と言ってもよい)があることを最後に付言しておきたい。

21世紀の幕開けは、「構造改革」という言葉で始まったといっても過言ではない。それは、戦後社会に一区切りが打たれるほどの時代の変化であった。すなわち、いろいろな意味で近代論理が行き詰まり、制度疲労や経済・社会の閉塞感などが充満し、一時代の終焉と新しい時代への移行が始まったという感を深くする様相を呈してきている。この傾向は、体育・スポーツの世界でも決して例外ではなかった。すなわち、ヨーロッパで生まれた近代スポーツが、その近代論理によって発展した社会構造のなかにどっぷり漬かりきってしまって、スポーツが本来持っていなければならない「人間性」「文化性」そして「娯楽性」を失い、「競争性」「商業性」そして「科学性」に過度に傾斜していったと私は認識している。その火付け役となったのが、近代オリンピック、世界選手権、ワールドカップなどの国際的イベントに象徴される「勝利至上主義」の出現であった。スポーツは、元来、「神ゴト・祭りゴト・遊びゴト」に始まって、時代が経るにつれて、「生産ゴト・訓練ゴト・競争ゴト」へと変化し、スポーツは今新しい「文化性」を獲得する一方で、それとは全く逆のベクトルをもつ活動へと二極分化を著しくしている。

このような時代認識・歴史認識を背景にし

た「スポーツ学」の構築を目指す、その基本となる考え方を、「スポーツ学」という術語の検討による考察を『「スポーツ学」考』と題してその一端をここに披瀝した。

参考文献・資料

(文献)

- 岸野雄三：現代保健体育学体系・2「体育史」：大修館書店：昭和48年
- 稲垣正浩：現代思想とスポーツ文化：叢文社：2002年
- ジャン・リュック・ナンシー著、西谷修訳：侵入者：以文社：2000年
- 近藤英男、稲垣正浩、高橋健夫監修：新世紀スポーツ文化論(体育学論叢Ⅳ)：タイムス：平成12年
- 稲垣正浩 責任編集：新世紀スポーツ文化論・Ⅱ(体育学論叢Ⅴ)：タイムス：平成14年
- 高橋幸一：スポーツ学のルーツ：明和出版：2003年
- 寒川恒夫：スポーツ文化論：杏林書院：1994年
- 大森千明編集：スポーツ学のみかた：朝日新聞社：1997年
- 早稲田大学スポーツ科学部編：教養としてのスポーツ科学：大修館書店：2003年

(資料)

- 稲垣正浩：スポーツ学事始め：未発表原稿
- 体育大学協議会：体育科学検討特別委員会「中間報告」
- 稲垣正浩氏との対話(座談会)記録
 - ・関西GAYAの会(スポーツ史研究者の会)：2003. 11. 1 奈良教育大
 - ・稲垣先生を囲む会：2003. 12. 20：大津プリンスホテル
 - ・関西GAYAの会：2004. 1. 11：奈良教育大